び　ぶ　り　お

University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.35 No.2(No.134) April 2002

ベートーベンは無類の文筆家で読書家であった

田幸　正邦

ベートーベンは、56年(1770－1827年)の生涯に、現存する手紙でも1,650通を残している。これは、私達の想像を絶する数である。

また、ベートーベンは無類の読書家でもあった。彼が他界した時(3月26日)、部屋の中に約300冊もの蔵書があり、文学、哲学及び宗教書が中心で、ドイツ人の著作と外国人の著書のドイツ語訳があった。その中には、シェークスピア、ゲーテ及びカントの多くの作品が含まれていた。ベートーベンは、シェークスピアの実に多くの作品、"オセロ"、"ロメオとジュリエット"、"ベニスの商人"、"冬物語"、"御意のままに"、"リャ王"及び"テンペスト"等を愛読していた！

所で、彼の死の翌日発見された、宛名や年代が記されてない、"不滅の恋人"宛の３通の手紙の受け取り人が誰であるか、未だに解明されてない。これまで、多くの研究がなされ、膨大な研究論文が発表されたにもかかわらず、謎に包まれた状態にある。私は、この謎を解く鍵は、ベートーベンの音楽作品に秘められていると考えている。ここでは、その謎を追究したい。

交響曲第８番は、1812年7－9月にボヘミア地方に滞在して作曲され、弟の居るリンツで完成された(10月)。第１楽章(ヘ長調)は、恋人との再会の喜びと、親密な語らいを表象している。第２楽章(変ロ長調)は、恋人と逢った後、再び会う約束をした他の地に馬車で向かう様を描いている。この楽章は、描写音楽の極めつけである。ベートーベンは手紙の第１信で、馬車で向かう途中、事故に見舞われたことを述べている。

第３楽章(ヘ長調)は、約束の地に到着したものの、恋人に再会することが出来ず、日を追うごとにあせりがあきらめに変わる心情を吐露したものである。これは、ベートーベンの並々ならぬ恋人への想いが伝わる楽章である。手紙で、数日後に再会する希望を述べている(第１信)。

第４楽章(ヘ長調)は、恋人に逢えない無念の情と、その衝撃から憤りに激変する心情を表象している。そして、最後に断腸の思いで恋人に決別を宣言するのである。

この様に、交響曲第８番はベートーベンの精神・心理の世界を見事に表象したもので、極めて独創的な作品である。この様な解釈は、しかしながら、彼が残した"不滅の恋人"に宛てた３通の恋文を理解することによって、初めて可能になった。

目次

ベートーベンは無類の
　文筆家で読書家であった ……田幸正邦 1
情報発信基地としての図書館 ……藤田陽子 4
新入生オリエンテーション案内 …… 5
文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の
　琉球の状況－④－ …… 豊平朝美 6
お知らせ …… 8

附属図書館のホームページ（http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/）もご覧下さい。